玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）の俳諧活動

竹内千代子

はじめに

寛政期の京都俳壇の重要な勢力のひとつは、洛東円山の双林寺を中心に展開していく。双林寺では、天明・寛政期以前から「墨直し会」が継続して毎年のように催されているが、最も安定して盛会なのは、高桑闌更が主催する「花供養会」で、天明六年以降継続して毎年のように行なわれる。寛政期の動向は、安永・天明期の芭蕉復興の動きから、芭蕉顕彰の形骸化へと移るが、花供養会もその一例である。また、都市系蕉門と地方系蕉門との差異は、顕著でなくなり、むしろ多くの俳諧宗匠は、地方俳人の増加に伴う需要に応える必要と、経済的な俳壇経営を考慮する必要とに関心が集まっていた。それらの要求を満たす一翼を担ったのが、出版を利用した地方俳人との積極的な交流である。寛政期以前からも俳諧師と書肆との関係は緊密であったが、寛政期の出版の特徴は地方俳人の参加を容易にしたことである。俳諧撰集『花供養』は、地方俳人に対して、定期的に刊行することによって入集の機会を安定して得させ、門閥に拘らない入集を容易にし、時に応じて一冊の経済的な負担までを含める施主を可能にした。俳諧の実質的な指導者ではないが、経済的にゆとりのある俳人はこれに乗じて文化的な充足感を持つことができた。これ以前の定期刊行物には歳旦帖などがあるが、歳旦帖に門人以外の地方俳人が入集することは難しい。義仲寺の『時雨会』も定期的に刊行、門閥に拘らない地方俳人の入集を歓迎しているが、施主は義仲寺看主に限られているので、『花供養』はより開放されていると言える。

その『花供養』の出版を、天明六年初刊から闌更が没する寛政十年まで、支えたのは菊舎太兵衛である。蕉門書林としては新参の書肆が、後には有力書肆の橘屋治兵衛に伍していくので

あるが、その初期においては版権を獲得することが重要であった。菊舎太兵衛は、その一端を書肆吉田九郎右衛門から得たと推察される。

吉田九郎右衛門は、三浦樗良、都市系の蕉門や芭蕉関連の俳書を中心に刊行していた。因みに、吉田九郎右衛門は、兄弟の二代に亙って営まれた書肆名である。また、兄は玄化と号する樗良門の俳諧師である。弟も甫尺と号する樗良門の俳諧師であり、安永七年に没した兄の号を引継ぎ玄化堂二世となる。吉田九郎右衛門は、樗良に従って闌更や花供養会に参集する俳人連中との交際を基盤にして書肆活動を展開していくが、甫尺の時代になってからは、次第に俳諧に傾倒していき、やがて天明四年頃までには書肆の事業を停止し、菊舎太兵衛に版権を譲るのである。菊舎太兵衛は、俳諧に於いて其成と号し、花供養会の常連で、甫尺と同席したこともある。このように本稿では、甫尺の俳諧活動と書肆吉田九郎右衛門としての活動とを顕らかにし、京都俳壇の動きを書肆との関係において考察する。

まず、甫尺の年譜事項を記す。甫尺は丹後の宮津に生れた（生年未詳）[注1]。画才に恵まれ、宮津の紺屋町に在った白杉家（御用紺屋）の下絵職人となる。その後、兄の玄化堂を頼って、安永五年頃に京都に移住したものと推察される。甫尺の俳諧活動は、管見の限りでは、安永五年の斗酔編『春興』の入集が初見である。安永六年九月序文の宮津住木下百尾編『秋のわかれ』に「京甫尺」が入集しているが、それ以前の丹後俳書に名が見られないことからは、甫尺はこの頃までに京都に移住して俳諧活動を開始したものと思われる。兄は安永七年に没するが、甫尺は兄の没後に二世玄化堂を号し、また書肆としての吉田九郎右衛門をも継承する。俳諧は、樗良に師事する。伏見城南寺田の秦夫、良水、雲裡、東塘らに加わる。なお、樗良は安永九年に没するので、直接師事した期間は短かったものと思われるが、樗良没後に『樗良発句集』（天明四年春序）を刊行するなど樗良への敬愛は深い。甫尺は旅を好み、京を拠点として行脚中のことが多かった。晩年は出身の丹後俳壇に浸潤し、丹後与謝野町石川に芭蕉塚[注2]を建立するに至る。寛政八年九月刊『俳諧百家仙』の甫尺肖像画は法体であるが、剃髪の時期は未詳。文化元年四月十七日に没する（享年未詳）。墓所は宮津の智源寺内[注3]。一説には、双林寺中にも樗良城南門人によって建てられたという。

一　兄玄化堂（書肆吉田九郎右衛門）

甫尺の兄は、玄化と号し、俳諧を樗良に師事する。書肆を営み、玄化堂吉田九郎右衛門と称したが、書肆としても樗良への援助を惜しむことはなく、終生それは変わることがなかった。玄化堂の俳諧活動は、丹後時代のものには認められない。管見の限りでは、安永五年春序文の江涯編『張瓢』に発句を入集するものが初期のものである。安永・天明期の宮津俳壇は、中川蝶夢に導かれてその影響が強かったのであるが、樗良はそれに対抗する都市系蕉門との交際が深く、兄玄化もまた樗良に従った。

兄玄化堂は、俳諧書肆であり、安永四年頃から「京蛸薬師通堀川東入」にての活動が認められる。安永五年には「蕉門俳書目録」を出しているところからは、芭蕉に関する俳書の出版権利を得たことが知られ、経営基盤を強くしていったものと推察される。また、樗良は与謝蕪村やその一門らの都市系蕉門との交際が親密であるが、吉田九郎右衛門は、樗良の俳書を中心として蕪村らの出版にも関係している。しかし、兄玄化堂は安永七年に没するので、その活動期間は短いものであった。兄の没後に甫尺は、玄化堂吉田九郎右衛門を継承する。その正確な時期については詳らかではなく、両者の活動も未整理の部分が残されているが、ここでは両者の書肆としての活動を中心に考証していく。

まず、兄吉田九郎右衛門の書肆としての活動が確認できるものを順に示す。

【安永元年】

○八月　喬木晴編『童蒙弁覧』

序文「明和九の秋望月夜　喬木晴序」。

刊記「京蛸薬師堀川東入町　吉田九郎右衛門」外四軒。

広告に「童蒙弁覧後篇」「学問手引草」の二冊がある。

【安永四年】

○一月　芝雀軒編『伝嚢秘事海』

刊記「安永四年未正月吉日　蛸薬師堀川東へ入　吉田九良右門（ママ）」外三軒。広告に「伝嚢秘事海後編」がある。

○六月　藤村如皋編『鳥韻鼓吹抄』（鶯の飼育に関する小本）

刊記「安永四年未六月　京蛸薬師堀川東へ入町　吉田九郎右衛門梓行」外一軒。

広告に「鶯大系図」「同（鶯）病鳥論」の二冊がある。

○十月　闌更編、兀峰編『桃の実』

序文「安永四乙未孟冬　半化居士」。

刊記「俳諧書林　吉田九郎右衛門」外三軒。
○十一月　闌更編、其角編『田舎乃句合』
序文「安永四年未霜月　半化房」。
刊記「俳諧書林　吉田九郎右衛門」外三軒。
○十一月　闌更編『俳諧蓬莱嶋』　序文、安永四年半化房。
刊記「安永四乙未霜月日　京師　吉田九郎右衛門」外五軒。

【安永五年】

○一月　麦里坊貞也編『歳旦』
端作「安永五年丙申」。
刊記「京蛸薬師堀川東入町　吉田九郎右衛門梓」。
○一月　斗酔編『春興』
奥「安永五申歳」。
刊記「書林　京蛸薬師堀川東入町　吉田九郎右衛門梓」
○春　江涯編『張瓢』
序文「安永五申春　桂子館蘭杜しるす」。
目録「蕉門俳書目録　京蛸薬師通堀川東江入町　吉田九郎右衛門板行」。目録書名「田舎の句合、常盤屋句合、野ざらし紀行、雪まろげ、によつぽり、蓬莱島、熱田三歌仙、翁文集、ひとつ橋、あさふ、初便、勧進帳、誰が家、あたたらね、滑稽雑談早学問、手引草近刻、蕉門三草紙、桃の実、鼾の図、はり瓢、居はからひ、壬生猿」。
なお、柿衛文庫蔵本、大文字屋文庫蔵本は、巻末に「玄化堂」とし広告は付けない。玄化発句一入集。
○八月　樗良編『俳諧月の夜』　刊記「安永五年丙申仲秋皇都書林　蛸薬師堀川東へ入　吉田九郎右衛門」。
目録「蕉門俳書目録　京蛸薬師通堀川東江入町　吉田九郎右衛門板行」。目録書名「田舎の句合、常盤屋句合、野ざらし紀行、雪まろげ、によつぽり、蓬莱島、熱田三歌仙、翁文集、ひとつ橋、あさふ、初便、勧進帳、誰が家、あたたらね、滑稽雑談早学問、手引草近刻、蕉門三草紙、桃の実、鼾の図、はり瓢、居はからひ、壬生猿、嵐雪発句集、月の夜、菊の香」。　玄化発句一入集。
○九月　几董編『続明烏』　刊記「安永丙申歳九月二十三日書林　吉田九郎右エ門」外一軒。
○十月　畆波編『菊の香』
刊記「安永五丙申冬十月　京書林　吉田九良右衛門」。
玄化発句一入集。
○十一月半　麦里坊貞也編『狂歌三年物』
序文「安永五年丙申霜ふり月半」。
刊記「京書林　蛸薬師堀川　吉田九郎右衛門」。

○十一月　畋波編『仏之座』
刊記「安永五丙申歳冬十一月　書林　吉田九良右衛門」。
玄化発句一入集。
○闌更編、土芳著『三冊子』
序文「安永五丙申　半化房闌更」。
刊記「俳諧書林　京　吉田九郎右衛門」外五軒。
【安永六年】
○一月　麦里坊貞也編『狂歌除元集』
端作「安永六丁酉のとし」。
刊記「京書林　蛸薬師堀川　吉田九郎右衛門」。
○春　江涯編『仮日記』
序文「安永六丁酉の春　江涯」。
目録「蕉門俳書目録　京蛸薬師通堀川東江入町　吉田九郎右衛門板行」。目録書目「田舎の句合、常盤屋句合、野ざらし紀行、雪まろげ、によつぽり、蓬莱島、熱田三歌仙、翁文集、ひとつ橋、あさふ、初便、勧進帳、誰が家、あたたらね、滑稽雑談早学問、手引草近刻、蕉門三草紙、桃の実、鼾の図、はり瓢、居はからひ、壬生猿、嵐雪発句集、月の夜、菊の香、石を主、仏の座」。　玄化、甫尺発句一入集。
○四月　樗良編『一日行脚』
奥「安永六丁酉年四月」。刊記「書林　吉田九郎右衛門」。
○五月　止角編、洛滄浪評〔辛崎布留奉納集〕
跋文「安永六年酉五月　止角書」。
刊記「京書林　蛸薬師堀川　吉田九郎右衛門」。
右の出版状況からは、樗良に関係したもの、闌更に関係したもの、蕪村、几董などの都市系蕉門に関係したものが特徴としてあげられる。また、『月の夜』『はり瓢』『仮日記』付録の広告からは、蕉門書林としの出版活動が知られる。以下に考証する。
『月の夜』『はり瓢』『仮日記』の目録「蕉門俳書目録　京蛸薬師通堀川東江入町　吉田九郎右衛門」からは、蕉門書林の一軒に参入していることが知られる。当時にあっては、芭蕉顕彰の動きが活発であり、「芭蕉」という権利[注4]は利益を産み出すものとして認識されおり、書肆としては手に入れたい権利の一つであったと思われる。次に注目されるのは、蕉門書林としてどのような権利を持つかであろう。より多くの書物を掲載する『仮日記』付録の目録によってみていく。なお、吉田九郎右衛門が出版に関与していることが確認できたものには、●印を付した。
●田舎の句合　○常盤屋句合　○野ざらし紀行

○雪まろげ　○によつほり　●蓬莱嶋
○熱田三歌仙　○翁文集　○ひとつ橋
○あさふ　○初便　○勧進帳
○誰が家　○あたたらね　○滑稽雑談早学問
○手引草近刻　●蕉門三草紙　●桃の実
○鼾の図　●はり瓢　○居はからひ
○壬生猿　○嵐雪発句集　●月の夜
●菊の香　○石を主　●仏の座

右のうち、吉田九郎右衛門が出版に関与していることが確認できたものは、『田舎の句合』『蓬莱嶋』『蕉門三草紙』『桃の実』『はり瓢』『月の夜』『菊の香』『仏の座』である。このうちの「芭蕉」という利権に直接関係しているものは、『田舎の句合』『蓬莱嶋』『蕉門三草紙』『桃の実』である。左にそれらの刊記の書肆名を記載順に記す。

●安永四年十月序『桃の実』（闌更編）
江戸西村源六、井筒屋庄兵衛、吉田九郎右衛門、西村市郎右衛門。

●安永四年十一月序『田舎の句合』（闌更編）
江戸西村源六、井筒屋庄兵衛、吉田九郎右衛門、西村市郎右衛門。

●安永四年十一月刊『蓬莱嶋』（闌更編）
京師林権兵衛、吉田九郎右衛門、浪華石原茂兵衛、浅野弥兵衛、東都前川六左衛門、山口吉郎兵衛。

●安永五年序『蕉門三草紙』（闌更編）
江戸西村源六、伊州内神屋三四郎、京井筒屋庄兵衛、野田治兵衛、西村市郎右衛門、吉田九郎右衛門。

これらの刊記からは、安永四、五年頃に活動が盛んであり、「芭蕉」に関する版権を求めた様子が窺われる。これらの権利獲得に有効に働いたのは、再刊に際して編集を担当した闌更との交際であったろう。また、『桃の実』『田舎の句合』は同じ連中の相版で、井筒屋、西村の老舗に漸く加わった体であるが、『蕉門三草紙』については、版権の重要な部分を握っていたものと推察している。後に述べる。

二　玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）

甫尺は、安永七年に没した兄の志を受け継ぎ、書肆吉田九郎右衛門を継ぎ、次の書物を刊行する。

【天明三年】

○春　南坡庵陸史編『まだら雁』刊

刊記「天明三年癸卯春　皇都書林　姉小路通油小路西入町　吉田九郎右衛門梓」。別本の刊記に「蕉門俳諧書林　京三条通御幸町西江入町　菊舎太兵衛」とある。

【天明四年】

○春　埜行編『半日行脚』（序跋）

序文「天明辰の春　闌更」、跋文「天明四辰春　定雅」。

刊記「姉小路油小路西へ入　吉田九郎右衛門梓」。

○春　甫尺編『無名抄』（序）

序文「天明辰の春　甫尺」。

刊記「姉小路油小路西へ入町　吉田九郎右エ門板」。

右の甫尺の刊記から知られるのは、書肆の住所が、兄の「蛸薬師通堀川東入」から「姉小路油小路西入」に変わっていることである。東西の通りは、堀川通のすぐ東の通りが油小路なので、「堀川東入」と「油小路西入」とは同じである。また南北の通りは、「姉小路」の南に三条通りと六角通りとがあり、その南が「蛸薬師通」である。従って、兄の店舗から三条通りと六角通りとを挟んだ北に移転したことになる。活動時期は、天明三年、四年頃であろうと推測される。それを裏付ける資料として、『能登日記』の刊行状況をみておく。甫尺が編んだ天明四年中夏序文の『能登日記』には刊記がない。これは、単純な手落ちとは考えられず、この後の甫尺が関与した刊行にも吉田の書肆名が見当らないところから推測すれば、書肆の実質的な廃業を視野に入れなければならないだろう。この後、甫尺は行脚に出ることが多くなる。そこで、天明四年以降の甫尺が関与している俳書の状況を示す。

【天明四年】

▽五月　甫尺編『能登日記』序。

序文「天明辰中夏　甫尺」。刊記なし。

【天明六年】

▽九月　闌更編『力すまふ』跋。

跋文「天明六むまの暮秋　行脚甫尺」。刊記「蕉門俳諧書林　京三条通御幸町西江入丁　菊舎太兵衛」。

【天明期】

▽この頃　樗良著『樗良発句集』刊。

「天明辰（四年）の春」甫尺序文。

目録「京三条御幸町西へ入町　蕉門書林　菊舎太兵衛梓」。

【寛政四年】

▽八月　樗良著『樗良発句集』再版。

刊記「安永六酉初夏刻／寛政四子仲秋再刻　御俳諧書林　京三条通寺西入　菊舎太兵衛」。

▽八月　樗良著『樗良集』再版。
「天明六丙午季春」玄化堂甫尺序文。
目録「蕉門俳諧書目録　京三条通寺町西　菊舎太兵衛蔵」。
【寛政五年】
▽仲夏　『樗良七部集』刊。
「寛政五年丑夏　玄化堂甫尺」序文。
刊記「寛政五癸丑仲夏　皇都書林　御幸町姉小路上ル　菱屋孫兵衛／同町　梅村伊兵衛／三条通寺西へ入ル　菊舎太兵衛」。
【享和三年夏】
▽夏　玉壺楼著『松のくち葉』跋。
序文「行脚甫尺　享和三癸亥中春」他一。
跋文「享和三癸亥之夏」。
刊記「蕉門俳諧書林　京三条通寺町西江入ル　菊舎太兵衛」。
以上の書目は、甫尺が出版事業を継続していたならば、吉田九郎右衛門から上梓されると推測できるものである。しかし、そうではないところからは、出版業の実質的な停止が認められるのである。そして、書肆としての権利の一部が、菊舎太兵衛に移行していったことが推測されるのである。

三　吉田九郎右衛門と菊舎太兵衛

吉田九郎右衛門の書肆の権利が菊舎太兵衛に譲られた証左として、以下のものを考察する。まず、『樗良集』（天明六年序、刊年未詳、東京大学付属図書館本）、および『三冊子』（享和元年春再刻、芭蕉翁記念館本）付録の菊舎太兵衛の書籍目録と、安永六年時の吉田九郎右衛門の書籍目録とのうち、芭蕉に関係した重複する書目をあげる。

○田舎の句合　○常盤屋句合　○野ざらし紀行
○熱田三歌仙　○翁文集　○ひとつ橋
○初便　○三草紙　○桃の実

次に、菊舎太兵衛の書籍目録中の樗良に関係した重複する書目をあげる。

○一夜四歌仙　○蕉門中興六家集　○樗良発句集
○樗良拾遺

また、『樗良発句集』付録の菊舎太兵衛の目録からも重複する書目をあげる。「蕉門書林　京三条御幸町西へ入町　菊舎太兵衛」とある初版本である。

○樗良発句集　○樗良文集
○樗良三部集（我庵集、石を主、燕つり）

○樗良集（時雨笛、菊の香、仏の座、花七日、一日行脚、
雪の声、まだら雁）

右のように吉田九郎右衛門の目録に掲載された芭蕉に関係した俳書および、樗良に関係した俳書が、菊舎太兵衛の目録にみられる。ここで、菊舎太兵衛の広告の年次を知る手掛かりとして、その住所について検討しておく。好都合なのは、毎年刊行している『花供養』の刊記である。それによると、左の如く寛政二年のものまでが「三条通御幸町西入」である。

寛政二庚戌年春三月
蕉門書林　京三条通御幸町西　菊舎太兵衛梓

寛政三年以降のものは左の如く「三条通寺町西入」となる。

寛政三辛亥三月
蕉門書林　京三条通寺町西入丁　菊舎太兵衛梓

これによれば、三条通を一筋東へ移転したことになる。なお、寛政元年刊『井華集』の住所が「三条通麩屋丁東へ入」とあるが、これは「三条通御幸町西入」に同じである。

さて、最初に、樗良の関係した俳書の版権が、吉田九郎右衛門から菊舎太兵衛へと移動したことを検討する。『まだら雁』の版本には、吉田九郎右衛門版と菊舎太兵衛版との両版が現存する。左に示す。

○吉田九郎右衛門版『まだら雁』刊記
（東京大学付属図書館本・洒二五二一）

天明三年癸卯春
皇都書林　姉小路通油小路西入町
吉田九郎右衛門梓」本文最終丁

右の吉田九郎右衛門は、天明三年の刊行であることと、住所から、甫尺であることが知られる。

○菊舎太兵衛版『まだら雁』刊記
（東京大学付属図書館本・洒二五二二）

天明三年癸卯春
〔　空　白　〕　」本文最終丁
蕉門俳諧書林　京三条通御幸町西江入丁　菊舎太兵衛
和本唐本石摺并ニ御経類古本売買仕候」裏表紙見返し

右の菊舎太兵衛の住所からは、寛政二年以前のものであることが知られるが、天明三年以降であることの確証はない。しかし、本文最終丁の空白部分が吉田九郎右衛門の刊記部分を削った広さと一致し、菊舎太兵衛の「和本唐本石摺并ニ御経類古本売買仕候」が入った同様の体裁のものは、天明五年七月（序）の『時雨の土産』や天明六年七月（序）の『力すまふ』の刊記にみえることから、確実な年次は未詳のままであるが、天明三年の吉

田九郎右衛門版より後刷りであると言えよう。

この他に、次の三書が同様な例として確認できる。『月の夜』の刊記は、「安永五年丙申仲秋　皇都書林　蛸薬師堀川東へ入吉田九郎右衛門」となっているので兄玄化堂の刊行である。『菊の香』の刊記は、「安永五丙申冬十月　京書林　吉田九良右衛門」とあり、兄玄化堂の刊行と考えられる。これら二書は、寛政五年に『樗良七部集』として「我庵集」「時雨笛」「石をあるじ」「年の尾」「花七日」とともに再版された。その刊記は、「寛政五癸丑仲夏　皇都書林　三条通寺西へ入ル　菊舎太兵衛」外二軒の相版である。

また、『仏の座』の刊記は、「安永五丙申歳冬十一月　書林吉田九良右衛門」とあり、兄玄化堂の刊行である。同書の下巻は寛政八年（序）に『蕉門中興俳諧六家集』の一巻として「御俳諧書林　京三条通寺町西　菊舎太兵衛」から出版された。

以上のように『まだら雁』『月の夜』『菊の香』『仏の座』などの版権が、吉田九郎右衛門から菊舎太兵衛へと移り、菊舎太兵衛の書肆経営の基盤の一つとなっていったことが推定されるのである。

次に、芭蕉に関係した書目についても同様に考えられるので、『三冊子』について考察する。左に刊記を示す。

○吉田九郎右衛門相版『三冊子』刊記

（芭蕉翁記念館本　一六四・二）

江戸　西村　源六
伊州　内神屋三四郎
俳諧書林　京　井筒屋庄兵衛
野田　治兵衛
西村市郎右衛門
吉田九郎右衛門

同書の刊年は不詳であるが、安永五年秋の序文を付す芭蕉翁記念館本等によれば、この頃の刊行と考えられる。そして、再版本は左の刊記によって、享和元年の四軒相版であることが知られる。

○菊舎太兵衛相版『三冊子』刊記

（芭蕉翁記念館本　一九二・六）

享和元辛酉春再刻
大坂心斎橋筋　奈良屋長兵衛
京寺町押小路上ル　橘屋治兵衛　合
蕉門書林　〔空　白〕　井筒屋庄兵衛　梓
同三条寺町西江入　菊舎太兵衛

なお、再刻された『三冊子』には、菊舎太兵衛の広告が付され

ており、版権の優位性を示していると考えられる。

闌更は芭蕉に関係した俳書の再編・再版を様々に手掛けた。出版にあたっては、樗良を通じての交際や、闌更の加賀住時代に交際が密であった丹後との地縁から、丹後出身である書肆吉田九郎右衛門に依頼したのであろう。書肆にとっては、一冊でも芭蕉の俳書出版に関われば、「蕉門俳諧書肆」であり、「芭蕉」という権利から利益を得ることができるのである。しかし、兄の吉田九郎右衛門が没した後、甫尺が引き継ぐものの書肆としての活動期間は短い。まもなく闌更との交際において関係があった菊舎太兵衛へと「蕉門俳諧書肆」の権利が譲られていくのである。かくして『三冊子』は、奈良屋長兵衛、橘屋治兵衛、井筒屋庄兵衛、菊舎太兵衛の四軒相版で享和元年春に再刻されたのである。この出版は板木を彫り直している。おそらくは、幾枚かの安永板が天明の大火によって焼失したためであろう。なお、井筒屋庄兵衛のみに住所が記載されていないは、天明八年の大火で板木の大半を失ったことによる衰退を示すものと考えられる。井筒屋は板木の焼失後、幾つかの俳書を再刻するが、『三冊子』は焼失を逃れた一冊であろう。[注6]

兀峰編『桃の実』は、元禄六年五月に井筒屋庄兵衛から上梓された。その後、安永四年に闌更の序文を付して再刊される。このときに関わった書肆は、刊記によって示すと左の通りである。

江戸　通本町三丁目　西村　源六
　　井筒屋庄兵衛
俳諧書林　　吉田九郎右衛門
　　西村市郎右衛門

この後、『俳諧七部拾遺』の一冊として、「初懐紙」「野ざらし紀行」「三歌仙」「一橋」「初便」「其袋」と共に出版される。同書は菊舎太兵衛が編纂し、刊行する。刊記は次の通りである。

享和二壬戌九月
蕉門俳諧書林　京三条通寺町西へ入
　　菊舎太兵衛梓

これによれば、右の七書は菊舎太兵衛が単独で版権を所持していることになる。このうち、吉田九郎右衛門の書籍目録と一致するのは、「野ざらし紀行」「三歌仙」「一橋」「桃の実」「初便」である。ただし、「桃の実」以外のものについては両書肆の関係は確認できていないので、今後の課題としたい。

其角編『田舎の句合』は、『桃の実』の再版書肆と同一の西村源六、井筒屋庄兵衛、吉田九郎右衛門、西村市郎右衛門から出版され、同一の刊記を持つ。後に、菊舎太兵衛から『芭蕉翁俳

諧四部録』の一冊として出版が予告されているが、実際には文政十一年に『俳諧新七部集』の一冊として「常盤屋句合」「続が原」「むさし曲」「別座敷」「雪まろげ」「桃の白実」と共に出版された。刊記は次のとおりである。

文政十一戊子年正月新梓

広府　江戸　上総屋利兵衛

京都　野田治兵衛

菊舎太兵衛

尾州　永楽屋東四郎

書甫　大阪　秋田屋太右衛門

同　良助

伊丹屋善兵衛

なお、『俳諧新七部集』のうち、吉田九郎右衛門の書籍目録と一致するのは、「常盤屋句合」である。ただし、これについては確認ができていない。

以上のように、芭蕉に関係した『三冊子』『桃の実』『田舎の句合』の出版状況からは、吉田九郎右衛門から菊舎太兵衛へと板権が譲られたことが推察されるのである。

おわりに

菊舎太兵衛は、寛政期の京都蕉門俳諧書肆の有力な書肆の一軒である。田中道雄氏の論考[注7]によれば、都市系蕉門俳書を主に扱った菊舎太兵衛は、天明六年三月刊闌更編『花供養』などのあたりから蕉門書林を標示して活動が活発になり、後には地方系蕉門俳書を主に扱った橘屋治兵衛と合梓するという指摘がなされている。菊舎太兵衛の俳諧書肆としての活動は、吉田九郎右衛門の書肆活動の吸収を契機として伸張していく。その兆しは、天明六年刊『花供養』に関わる以前の天明四年のころから感じられるのである。菊舎太兵衛は俳諧師でもあったが、書肆であった。甫尺は書肆でもあったが、俳諧師であった。俳諧師と書肆との兼業は二人に親密感を持たせながら、菊舎太兵衛は書肆の方に、甫尺は俳諧師の方に傾斜していったのである。

因みに、菊舎太兵衛は俳諧をよくし、其成と号したことは周知のところである。其成は、甫尺編『無名集』（天明四年春序）に発句二を入集、甫尺が序文を寄せた『松の朽葉』（享和三年夏跋、菊舎太兵衛刊）に発句一を入集している。その他、闌更編『花供養』にも甫尺とともにその最初の天明六年版から入集するなど、甫尺と関連した活動が長期間に亙るのである。

注1　甫尺の年譜事項については、「郷土と美術」44号の小室洗心氏著「玄化堂甫尺」、同80号の蕪村・甫尺特集号とを参照した。清水孝之氏『追跡・三浦樗良』によれば、「宝暦初年生れ」とされる。

注2　与謝郡野田川町（現、与謝野町）石川の神宮寺境内に建立。碑面「春もやゝ気しきとゝのふ月と梅　甫尺拝書」。

注3　二〇〇四年七月二六日に智源寺住職に電話で確認することができた。また、「郷土と美術」80号によれば、次のごとくである。

「一、文化元年（一八〇四）四月十七日没

文化元年子四月

丈陰甫尺居士　池之谷甫尺ハイカイ人

（宮津知源寺過去帳）」

また、墓については、二〇〇六年九月三日丹後宮津の花谷道恵氏の調査により確認された。智源寺内にあり、ずんぐりとした自然石に〈甫尺居士墓〉、碑裏に〈文化元四月十七日　社中建立〉と刻まれている。

注4　永井一彰氏論考「「芭蕉」という権利（一）（二）」（奈良大学紀要、三一号・奈良大学総合研究所所報、十二号）を参照した。

注5　『樗良発句集』（天明四年春序）の菊舎太兵衛広告の書目に天明七年刊記の『骨書』があり、これより以後のことと推測される。また、菊舎太兵衛の住所は、寛政二年までは「三条御幸町西入」であり、寛政三年春には「三条通寺町西入」に移っている。従って、御幸町の住所をもつ菊舎太兵衛の刊行は、天明七年から寛政二年までの間であろうと推測される。また、『樗良発句集』は板木焼失のため寛政四年に再刻される。刊記は左のとおりである。

安永六酉初夏刻

寛政四子仲秋再刻

御俳諧書林　京三条通町寺西入　菊舎太兵衛

注6　永井一彰論考「板木のありか」（近世文芸・八四号）を参照した。井筒屋庄兵衛の焼失した俳書のなかに『三冊子』は含まれていない。

注7　菊舎太兵衛の蕉門俳諧書肆活動については、田中道雄氏の論考「蕉風復興運動の二潮流」（『蕉風復興運動と蕪村』２０００年・岩波書店刊）に述べられている。

なお、菊舎太兵衛は、天明六年の『花供養』で「蕉門書林」を標榜しているが、天明五年春刊『俳諧世説』の左の刊記や広告によれば、この時までに芭蕉の俳書の板権を

持っていたものと推測される。

俳諧世説後編未刻

同蓬莱嶋　全三冊　出来

蕉翁文集

天明乙巳春

平安書林　間之町通御池上ル町　林権兵衛

御幸町通姉小路上ル町　菱屋孫兵衛

同町　菊舎太兵衛

（天理大学附属天理図書館蔵本　わ一七四・三四）

広告中の「蓬莱嶋」「蕉翁文集」は、吉田九郎右衛門の「蕉門俳書目録」にも記載されており、吉田九郎右衛門の板権が菊舎太兵衛に移譲された初期のものであろうと推測される。

【付記】本稿を成すにあたっては、丹後宮津住の花谷道恵氏、田中道雄氏にご教示をいただきました。記して学恩に深謝申し上げます。

（たけうち　ちよこ／英知大学助教授）